

官立山口高等学校

全国に先駆け男女共学に

昭和20(1945)年9月、旧山高は県内でもいち早く授業を再開した。しかし戦時中、十分に勉学に励むことができなかつたため、授業についていけず学校を辞めざるを得ない者もいた。また、戦後の食糧難による試験や授業のボイコットなど、混乱は長く続いた。

戦後最初の入学試験は昭和21年4月に行われた。募集人員は文科80名、理科160名であったが、第一次試験の合格者の5割以上を軍関係諸学校からの受験者が占めた。

昭和22年、旧山高は全国に先駆けて男女共学制となる。しかし男女共学にあたっては、生徒の中で大議論が起こり、講堂で何時間にもわたる話し合いがもたれた。当初は反対派が多かったが、「真理の前に男女の差はない。日本もデモクラシーになる。男女同権の時代である。いずれ女性に門戸を開かざるを得ないとすれば、むしろ山高が全国に先駆けて門戸を開き、わが山高からマダム・キュリーを出そうではないか！」という声で空気が変わったという。

昭和22年に1人、翌23年に1人の女子学生が入学したが、学制改革により、23年度の入学生は在学期間1年で、翌年には大学へ進学したため、旧山高で3年間の課程を修了した女子学生はただ1人であった。



文芸部「鴻峰」復刊号
復刊の辞には、「建設へと我々は急ごう」と、新しい時代へと向かう気概が現れている。

復活した野球戦 (対旧制松山高等学校)

旧山高の学生生活と言えば、野球部の対旧制松山高等学校戦が有名である。昭和21年の2月頃、突然、旧松高生2名が旧山高を訪れ、定期戦を復活しようという話になった。松山で行うこととなったが、戦時中にグラウンドのバックネットは供出され、その上、グラウンドは耕されて畑になってしまっていたため、とても野球ができる状態ではなかった。そこで、松山中学校のグラウンドでバックネット代わりに霞綱を張って行った。延長10回の末、ようやく3対2で旧山高が勝利を収めた。対旧松高戦は旧山高終焉を迎える昭和24年まで続いた。



大学への昇格運動

昭和22(1947)年、学制改革により、旧山高は学校廃止か大学への昇格か、いずれかの選択を求められ、8月に大学への昇格運動をスタートした。

第1案は「文学部、理学部を設置し、あわせて新制高校の教員養成もかねた独立の文理科大学」、第2案は「県内の高専、高校による大学連合中の文理科大学」とし、文理科大学への昇格を目指した。9月に教職員や山口在住の同窓会員による「山口文理科大学設立後援会」が発足、10月には「昇格人形」という人形を1個20円で売り出し、2,000個を売却するなど、500万円を目標に募金活動を始めた。

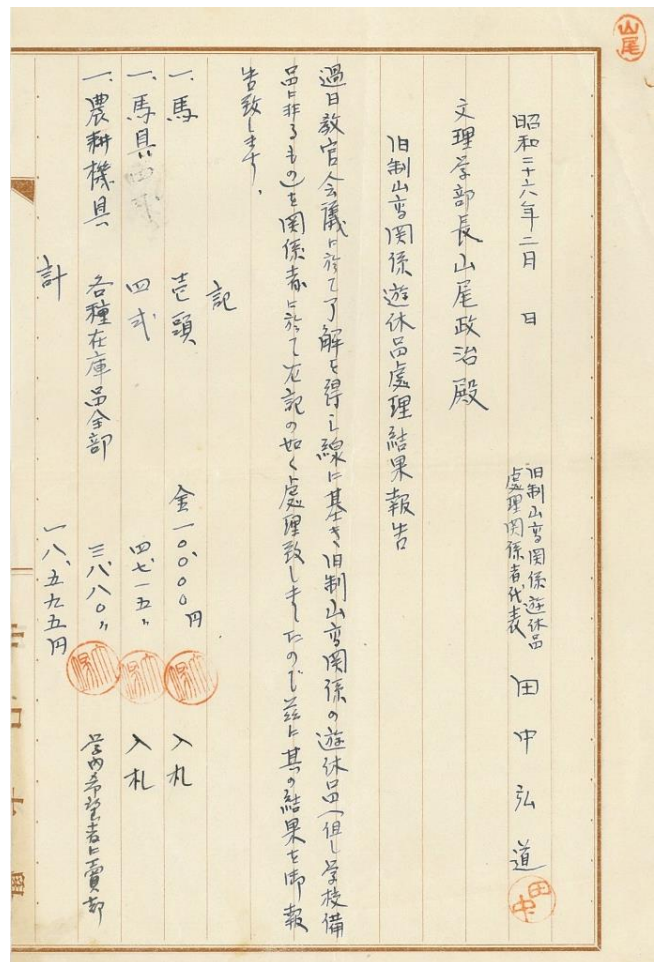
このような文理科大学へ向けた旧山高の動きの一方で、国や県の方針により、当時の長崎太郎校長が中心となって、総合大学設立へ向けた昇格運動を活発化させた。校内では学制改革に反発する声もあり、長崎校長追放のストライキも起こった。

山高の終焉

昇格運動の末、旧山高は昭和24年6月から山口大学文理学部として新たな道を歩むこととなった。文理学部発足後も、旧山高には22年度入学の学生(29回生)が最後の卒業生として残っていた。旧山高の昇格、山口大学設立に尽力した長崎校長は6月6日付で依頼退職し、後任の校長は山口大学初代学長・松山基範が兼任した。11月には、旧制福岡高等学校長・山尾政治が山口大学文理学部長に任ぜられ、旧山高校長を兼任し、最後の校長を務めた。

そして昭和25年3月、最後の卒業生を送り、旧山高はその門を閉じた。

大正8(1919)年の創立以来、124名の教職員が奉職し、4,600余名の卒業生を送り出した。現在の糸米の地には、旧制山口中学校を礎とした、県立山口高等学校が建っている。その校門を入ってすぐ左には、旧山高の講堂が、登録有形文化財として保存され、かつての栄光を物語っている。



「旧制山高関係遊休品処理結果報告」(昭和26年2月)

山尾文理学部長宛 旧山高の学校備品以外のもの、馬や馬具、農耕機具を売り払った報告がされている。